

「スクラムドクターのこだわり」

「入念な準備こそが勝利をもたらしす」

2019年、日本列島にラグビー旋風を巻き起こした世界大会から3年。日本のスクラムを変えた男が、こたわるディテールとは――。



長谷川 慎

多羅正宗 = 文
text by Masataka Tara
三宅史郎 = 写真
photograph by Shiro Miyake

いと組み方や対処法を話し合いました」

スクラムこそが存在意義。そんな崖っぷちの2人は研究成果をピッチで実践し続け、気づけば連続出場記録を打ち立て雑誌の取材を受けるまでになった。「背水のスクラム研究」から一番に定着した長谷川は、07年の引退までにジャパンで40キャップを獲得。名プロップとして歴史に名を刻んだ。

新たな旅の始まりは09年だ。引退後、清宮幸監督の要請によりサントリーで社員コーチをしていた長谷川に、人生を変える出来事が起こる。4年に一度のラグビー世界最強決定戦が、日本にやってくる――。09年に19年の日本大会開催が決まりました。これはすごいことになる、外から大会を見ていたくない、と思いました。『ジャ

パンのコーチとして日本大会を迎える」ことが夢になり、翌年に会社を辞めました」

傍目には大胆不敵な夢だったろう。しかし決意は揺らぐはず、10年秋、大企業の会社員からプロコーチに転身。清宮監督と共にヤマハ発動機的首脳陣になると、まず自分だけの「スクラムの教科書」を作り始めた。

「清宮監督からの『感覚で喋っている』という指摘を受けて、スクラムの感覚を言葉にする『教科書作り』をしました。家の中で身体を動かしながら言葉を羅列していったら、30〜40枚の文書になりました」

「力を漏らさない」「後列5人の力を伝える」といった長谷川理論の本格的な萌芽だった。清宮監督、長谷川コーチのスクラムに懸

「チームのためなら何でもやります。選手が良いスクラムを組んでくれることが息抜きです」



SHIN HASEGAWA

1972年3月31日、京都府生まれ。東山高から中央大に進学。その後サントリーに入社し、'97年に日本代表デビューを果たす。プロップ、フッカーとして40キャップを重ね、'99年、2003年のW杯に出場。'07年に現役を引退。その後、サントリー、ヤマハ発動機などでコーチを務める。'16年、日本代表にアシスタントコーチとして参加。'19年のW杯日本大会でのベスト8進出に貢献。日本代表スクラムコーチとして'23年大会でのさらなる飛躍を目指す

ける情熱は比類がなかった。スクラムを組むためにだけにフォワードがフランスに遠征するという、前代未聞の海外武者修行を2度（'12、'15年）にわたり敢行。フランスでの経験からオリジナリティ追求の重要性を認識した長谷川は、独自理論で強力スクラムを作り上げる。迎えた'16年のリーグ開幕戦、3連覇王者のパナソニックをスクラムで圧倒して撃破。名声を高めた長谷川の下に同年、念願の知らせが届いた。

長谷川は4人いるジャパン主要コーチのうち、唯一の日本人コーチとして'19年大会を迎えた。初の8強入りに尽力すると、大会後に景色が一変していた。

「街でスクラムコーチが声を掛けられるんだから驚きますよね。あの大会でスクラムへの関心が高まりました。ヤマハの元選手たちは今、様々なチームでスクラムコーチをしています。本当に嬉しいことです」

ジャパンのコーチとして'19年大会を迎えたい――。そんな夢を抱いた男の有言実行が、多くの人に豊かな実実をもたらした。

「次なる旅路はもう始まっている。'23年大会へ向けて、引き続きジャパンに携わる。ただし、スクラム強化だけが役割ではない。日本人のコーチは僕だけですし、潤滑油の役割もあると思っています」

「自分からそう言ったことはないですよ」福々しい笑顔は恵比寿様のようだ。しかし8対8の真剣勝負「スクラム」と向き合う姿には、阿修羅のごとき迫力がある。長谷川慎。2019年、日本ラグビー史上初の8強入りに貢献したジャパン唯一の日本人主要コーチは、1cmのディテールにこだわる日本流の緻密さで世界を驚かせ、スクラムの価値、奥深さを広く伝えた。

「逆境を乗り越えてきた努力家だ。4歳から競技を始め、京都・東山高校時代は花園に出場。中央大学では主力フッカーとして活躍し、卒業後はサントリーに入社――華々しいキャリアだが、窮地と無縁ではなかった。転機は社会人2年目だった。『フッカーの後輩として大学時代から日本代表だった坂田（正彰）が入ってきて、1番のプロップに弾き出されたんです。1番は高校時代に1年間しかやったことがありませんでしたが、レギュラーになりたい一心でそこから本格的に取り組みました」

「不本意なポジション変更から、その後ジャパン不動の1番に君臨するのだから尋常ではない。プロップ歴1年だった長谷川が、スタメンに定着できた理由がある。

「ジャパンのデビュー戦から2試合は怪我人の代役でした。ただ初先発した2試合目に、スクラムでトライを取ったんです」

「代役ながらスクラムでアピール。3試合目の1番も任せられた。同時期に3番プロップになったサントリーの先輩・中村直人と、スクラムの研究に没頭する日々が始まった。『スクラムを押しさないとメンバーから外される』という恐怖心でいっぱいでした。中村さんと1日10時間くらいスクラムの映像を見ながら、ああでもない、こうでもな

ミーがめっちゃ褒めてたで」と伝えたりもします。チームのためなら何でもやります」

「繊細な心で寄り添い、さりげない言葉で不安を和らげる。敬愛される理由は、卓越した指導、理論だけが理由ではない。

「本業のスクラム指導はさらに錬磨されている。長谷川は'21年、入念な準備をした上で、'19年大会以来2年ぶりの再始動となったジャパンの一次合宿に臨んだ。

「様々なチームから集まった選手が2年ぶりにスクラムを組んだわけですが、事前に全体と個別のミーティングをしたら、練習の一本目から完璧なスクラムが組めました」

スクラムに手応えを得たジャパンは'21年秋に欧州遠征を行った。アイルランド戦でチームは55点差の大敗を喫したが、スクラムは優勢。砂地のピッチに苦心したポルトガル戦では、ホーム寄りのレフリングも見当に入れて「落とさない」スクラムを特訓。

「実際の試合で見事に一度も崩れなかった。徹底的に準備する職人の技だった。『アドリブが苦手なんです。準備したから大丈夫、という性格なのだと思えます』

入念な準備はプライベートにも及ぶ。選手時代からこだわってきた睡眠もそうだ。「睡眠は一日の終わりではなく、次の日の準備だと思っています」

長谷川には試行錯誤をしながら作り上げた就寝前のルーティンがある。そんな凝り性の職人が選んだ寝具が、マニフレックスのマットレスと枕であり、12年から10年にわたり愛用している。

日々の準備を繰り返す長谷川に、仕事の息抜きについて訊ねた。スクラムと選手への、尽きることのない愛情が返ってきた。「選手が良いスクラムを組んでくれることが息抜きです」

「求道者の探求に終わりはない。」

